

国際協力と私

～ハート・オブ・ゴールドの活動を通じて～

ハート・オブ・ゴールドの副代表理事・田代氏

火曜午餐会・7月第1例会は4日12時15分から当部5階大会議室で開催した。講師に岡山県にある特定非営利活動法人ハート・オブ・ゴールドの副代表理事・事務局長の田代邦子氏を招き『「国際協力と私」～ハート・オブ・ゴールドの活動を通じて～』をテーマに語って頂いた。田代氏はカンボジアでの活動について映像やパワーポイントで示し「スポーツを通じた開発支援事業、自立復興支援事業、そして国際理解交流事業の活動を続けてきた。そしてスポンサー、支援者の方々と喜びを共有することが大事」と語った。講演要旨は次の通り。

1996年から始まり今年で22回目を迎える「アンコールワット国際ハーフマラソン」。カンボジアの内戦により、国民の多くの女性や子供が犠牲になった。マラソン大会は地雷廃絶を世界へアピール、そして参加費は義手・義足支援や障がい者スポーツ復興など使われ、「平和・共生」のメッセージを発信している。この大会をきっかけに参加者たちと共に「心の金メダル」は誰でも持つことが出来る、との思いで第一回大会から参加されているマラソンランナーの有森裕子さんを代表に「ハート・オブ・ゴールド」を設立。主にカンボジアで活動を続けてきた。

ハート・オブ・ゴールドの活動

主な活動は、スポーツを通じた開発支援事業、自立復興支援事業、そして国際理解交流事業。特にスポーツを通じた開発支援事業で、国際競技大会へ参加出来るように支援活動。また女性や子供、障がい者の人たちが社会参加出来るために、カンボジアの障がい者陸連に皆が集まりスポーツを楽しみ、友達を作り人間関係を広め楽しい人生を送ってもらうための支援を行っている。

活動のひとつである体育科教育への支援。カンボジアでは子供はたくさんいるが、学校が少なく教員も少ないため、読み書きそろばんを習うのが精一杯の状況だった。情操教育である音楽や体育、美術などの授業が出来なかった。カンボジア

見学し勉強してもらう。帰国後は、指導要領に沿った指導書を作成。そして現地の先生方が授業を出来るように各地方に回り指導会を開く活動を続けてきた。

またカンボジアは内戦により母子家庭が多い。将来子供が親の面倒を見る、子供がいない人は非常にみじめになる。母親が病気になれば子供は路頭に迷ってしまう。最低でも読み書きそろばんが出来るように、国内の養護施設だけではなく海外のNGOや海外の政府が養護施設の建設を行っている。また里親制度を進めているところです。

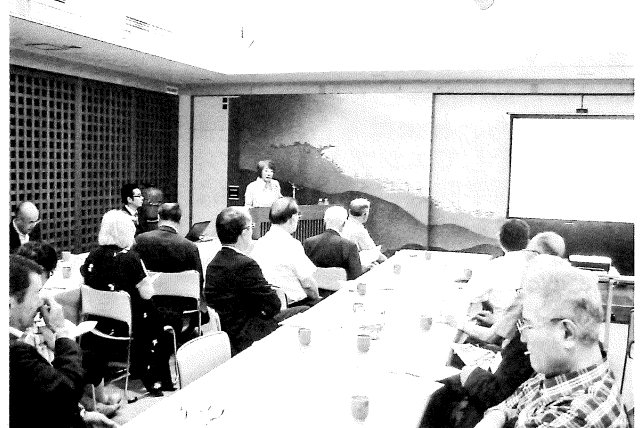
活動目標

国際協力で有名な言葉に「魚をあげるのではなく、魚の取り方を教える」がある。不足している物資を支給することが良いとは限らない。途上国での支援は、援助漬けになり依存体質を生まないように気を付けなければいけない。自分で物を作る、採取する、考える技術、そして人材育成に力を入れ、国を復興させる手伝いを考えた。カンボジア国民の手で、カンボジアが復興することが何

政府も情操教育は良いことだと取り入れることにはなったが、教員、組織、そして施設など何もない状態。そのためJICA（国際協力機構）、筑波大学、地方自治体などの団体とネットワークを組み活動をしてきた。

また、2001年から始まった『青少年・指導育成スポーツ祭』。サッカー、バスケットボールなどボール一つで遊べるものを通じて、現地指導者を育成するとともに、ルールを守り、協力し合う、フェアプレー精神などを子供の心の中に育てる活動。

しかし指導要領もなく、まずは人材育成から始めた。岡山県や市から助成金でカンボジアの方に来日してもらい、体育事情や行政の現場を実際に



よりの目標として私たちは活動を続けている。

人材育成活動が10年経ち、里親の子どもたちが自立をしてきた。一人が育つことで繋がり大勢の人が育つ。人を育てることは間違いではなかったと感じている。

活動から学んだこと

まず遠くの目標と近くの目標をしっかりと持つこと。遠くの目標からぶれないように、自問自答しながら目指すこと。そしてネットワークを組み小さな善意を集めて大きな力にする。そして周りの専門家などに助けていただきながら一緒に活動を行う。失敗を恐れず、目標に向け独自の方法を探し臨機応変に異文化を受け入れながら活動する。そしてスポンサー、支援者の方に詳細に活動、成果を報告し喜びを共有することが大事。

NGOの教育とは、共に育つこと。活動する側もされる側もどンドン育つ会でありたい。そして最終的には、変化を楽しみ、何とかなるという楽天的な考え方が大事だということ学んだ。